

第9回セミナーを12月3日(土)13:30~15:30に開催します。

会場：愛知文教大学 ABUラウンジ

テーマ：身近な暮らしの歴史を学ぶ ―江戸時代の尾張のお酒事情―

講師：学び合う学び研究所 フェロー 内田 吉哉 先生

時代を表す絵図から、考え話し合うことが教材には多く、本日も紹介いただいた「尾張名所図会」が授業での活用が広がると思いました。

児童生徒にとって「尾張名所図会」は絵図から気づくが多くあり、政治、経済とともに生活文化史から、その時代を探求することは大切な学びの方法だと改めて感じました。

ケンミンSHOWが人気の番組であることも、内田先生のお話を通じておもしろく感じました。

尾張名所図会という、図が中心だが、あくまでも名所案内が目的の史料から、尾張地方で日本酒（お酒）がどのように飲まれていたかを明らかにする手法が新鮮でした。

もっと細かい史料が見つければ、もっと詳細な考察ができるということでもあります。本来の目的に合致した史料が、そんなに運良く見つかるものではありません。それでも、ある史料をどう使うかで、新たな知見が生まれることがあります。

小牧市資料研究会の坂下会長（応時中校長）に参加していただいたことで、小牧市の郷土史研究が、これまでの先行研究資料の解説にとどまらない、新しいステージに立てればと期待しています。

今日のセミナーの学びで大切だと思ったことは「資料の見方・分析の仕方」です。

尾張名所図会のことは、小牧山や岩崎清流亭の昔の様子が表されており、以前から興味をもっておりました。また、CCnetで2、3年前に尾張名所図会に描かれている場所の現在を追う番組をシリーズとして毎週放映していました。実は、その番組のリポーターを昔の教え子がやっていたものですから、何度も見ており身近なものとして感じておりました。

本物の尾張名所図会が、天保年間から明治どころか附録は昭和5年に刊行というお話しは、たいへん驚きました。そして、先回の寺子屋の教科書と同様にとても微細に丁寧に描かれており、それが酒に焦点を当てた江戸時代の暮らしぶりを研究する手がかりになっているということに、なるほどすごいなと思いました。研究者としての視点や確かな分析の仕方を学ぶことができ、たいへん意義深かったです。その意味では、他の視点に焦点を合わせ研究すると新たな文化が見えてくるかも知れません。まだまだ尾張名所図会は宝の山ということになります。おもしろいものだなあ、と資料分析の面白さを教えていただきました。ありがとうございました。

歴史の研究者が、テレビ番組や小説に描かれている内容は、フィクションが多いのでということは何度も聞いてことがあります。今回のセミナーでは、どのように資料を読み解いているかについて、学ぶことができました。

尾張名所図会の中で、それぞれの図会の信頼性について話され、この図会は、想像で描かれた内容であるので、庶民の生活を描写していないという指摘がありました。そして、信頼できる図会と信頼できない図会に分類されていました。専門家が資料に向き合う厳しさを窺い知ることができました。

研究者が、研究を重ねた成果として、現在の歴史があることを認識する必要があると思

ました。小説やドラマに描かれた史実の方が楽しく、そちらに傾きがちではありますが、学問の成果としての歴史の重さを感じなければならぬと、改めて思いました。

お酒に焦点を当て、「尾張名所図会」という身近な内容の本から、こんなにも多くの情報が読み取れるのかと非常に驚きました。資料の読み取り、分析の仕方を勉強させていただきました。また、東海地方で生まれ育つ中で、あらゆる面で関西関東の文化や独自の文化が入れ混じると感じておりましたが、これがお酒の飲み方にも表れると知り大変興味深かったです。